

《 講演要旨 》

講演1 13:35~14:15

国立病院機構弘前病院 消化器・血液内科 山口 公平

初発時から抗 HPA-5a 抗体による血小板輸血不応症を合併していた急性骨髄性白血病の一例

【症例】38 歳女性。発熱持続で前医にて末梢血中芽球を認め当科初診。急性骨髄性白血病の診断で寛解導入療法開始。感染合併もあったが、連日の血小板輸血にても血小板数は上昇せず。輸血前の保存検体も用いて検査施行し抗 HPA-5a 抗体が検出(抗 HLA 抗体はなし)。その後、日本赤十字社 関東甲信越ブロック血液センターにて検査施行していただき HPA-5bb 抗原保有も判明。2 回目の寛解導入療法では適合血が間に合わず血小板数は低値で経過したが、その後の地固め療法では大量ガンマグロブリン療法併用しつつ、血液センターのご尽力により適合血を供給いただき安定した血小板数で治療継続できている。なお HLA 一致同胞の実弟がいるが、HPA-5aa 抗原保有者であった。

講演2 14:20~15:00

青森県立中央病院 中央診療部門 部門長 久保 恒明

青森県の成人造血幹細胞移植の 20 年を振り返って

青森県では 2000 年から成人同種造血幹細胞移植に取り組んできた。移植技術の進歩はめざましい。当初の造血幹細胞移植は徹底した骨髄破壊を必須条件としたが、その後の骨髄非破壊移植の確立は高齢者に対する移植の道を切り開いた。また、血縁ドナーの得られない場合にも、骨髄バンクやさい帯血バンクからの造血幹細胞の提供は多くの患者の救命を可能にした。本県データとして 454 回の造血幹細胞移植を振り返り、当初は生存率の低かったさい帯血移植も、最近では血縁や非血縁骨髄移植と同等の成績にまで到達している。

今日、骨髄バンクとさい帯血バンクの存在する意義は甚だ大きく、多くのドナーの存在が日本の造血幹細胞移植医療を支えている。

講演3 15:10~15:50

日本赤十字社血液事業本部 技術部次長 高梨 美乃子

日本赤十字社の造血幹細胞事業について

造血幹細胞移植には、骨髄バンク及び臍帯血バンクの活動が必須である。日本赤十字社は「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」に基づき、厚生労働大臣から国内唯一の造血幹細胞提供支援機関として指定を受け、普及啓発活動や骨髄ドナー登録業務等により造血幹細胞事業を支援している。

また、臍帯血供給事業者として4カ所(北海道、関東甲信越、近畿、九州)のブロック血液センターに臍帯血バンクを設置し、臍帯血の調製保存と医療機関への提供のほか、品質向上のため採取施設への技術研修等を行っている。

講演4 15:55~16:25

青森県骨髄ドナー登録推進会 代表 佐藤 孝治
青森県骨髄ドナー登録推進会 青山 春美

青森県のドナー登録の現状について「ボランティアの立場から」

日本骨髄バンクは 1991 年 12 月に設立され、今年の 12 月で 30 年周年を迎える。我々の団体が出来たのは、15 年後の 2006 年 6 月に青森県骨髄バンク登録協力会として立ち上げし、2018 年 4 月に青森県骨髄ドナー登録推進会の名称に変更した。

ドナー登録も全国最下位の登録数から、スタートした青森県のドナー登録の現状と問題点をボランティアの立場から報告する予定である。